

## 【vol.38】ダイアトニックコードの分類、T、D、SD ～その1～

こんにちは、大沼です。

前回、ついに自力での耳コピにチャレンジしてもらいました。

最初は時間が掛かるかも知れませんが、  
やってみたら、意外とどうにかなるもんです。

いきなり小難しい曲をやるのではなく、シンプルな曲からコピーして行って、  
徐々に耳を慣らしていくのが耳コピ上達のポイントです。

僕は中学生の時に、ジャズギタリストの  
ウェス・モンゴメリーを耳コピしようとして、  
さっぱり聴き取れずに、一度挫折したことがあります。

今思えば、全然身の丈に合っていない曲をやろうとしていて、  
そりゃ出来なくて当然だよ、って感じですが。

しかもその頃は音楽理論はもちろん、  
スケールもペンタくらいしか知らなかったですし。

その時聴き取っていた音源のピッチが、基準ピッチ(多くは A=440Hz 前後)から  
結構離れている事にも気が付かず、「なんか合わねーなー」とか思っていました。

とまあ、先にもお話ししましたが、耳コピのスタートアップの段階では、  
聴き取りやすい曲を選ぶ、というのは結構大事です。

じゃないと、僕のように、本来必要のない  
挫折をする可能性がありますからね。

やりやすいジャンルとしては、パンク系、ロック系、ハードロック系、  
後はバンドスタイルのポップス、といったところですね。

この辺は、曲にもよりますが、

比較的シンプルな構成になっていることが多いので。

「どうしてもやりたいんだ！」と言う曲が、一定以上の難曲だったとしたら、僕は止めませんが笑、それなりに時間が掛かるであろう事は、覚悟しておきましょう。

さて、では今回は、引き続き“Photograph”をサンプルに、楽曲分析のポイントを学んでいきましょう。

今回のテーマは、タイトルにもある様に、

### 『ダイアトニックコードの、トニック、ドミナント、サブドミナントの分類』

です。

これをわかっていると、楽曲の構造が判別しやすくなり、展開が予測できるので、曲中での「コード進行の流れ」みたいなものが一目でわかるようになったりします。

もちろん、コピー、アドリブ、分析と、全ての行為に通じる知識なので、きちんとマスターしていきましょう。

ではまず、これまで見てきたダイアトニックコードなのですが、これら7種のコードは、機能として大きく3つの種類に分けることが出来るのですね。

そして、それぞれに役割のようなものがあり、そのコードを鳴らすと、次はこの様に進行したくなる、といった性質があるのです。

(※正確には、特定のコードに進行したくなったり、どのコードにでもいけたりする、と言った感じ)

その分類の大きな括りがタイトルにもあるように、

- ・トニック(コード) (tonic)
- ・ドミナント(コード) (dominant)
- ・サブドミナント(コード) (subdominant)

の3つ。

それぞれ頭文字をとって、書籍などでは、

**トニック→T、ドミナント→D、サブドミナント→SD**

と、表記されていたりします。

で、ダイアトニックコードの7つを、そのコードの機能(種類)によってそれぞれに割り振ることが出来る、と。

大まかに、3つの分類を説明すると、トニックコードは、  
スタート地点だったり、帰って来る家(ホーム)のような機能のコードです。

コード進行は、(多くの場合)トニックコードに始まり、トニックコードに終わると言うことですね。

次に、ドミナントコードは、そのコードを鳴らすと、すぐトニックコードに進行したくなる(感じになる)コードです。

トニックコードを家とするならば、曲が始まったら(家から出かけたら)、最後にはトニックコード(家)に帰ってきますよね？

ドミナントコードは、鳴らすと、「ああ、そろそろ(トニックに、家に)帰ろうかな」という感じになる性質のコード、と言うことです。

最後にサブドミナントコードですが、これは、

ドミナントコードほど、家には帰りたくはないけど、  
「まだ、出かけてようかな？でも、別にもう家に帰ってもいいな」という様な、  
比較的自由的な進行感のあるコードです。

ドミナントが、「とにかく家(トニック)に帰りたい！」というコードだとしたら、  
サブドミナントは、「まあ、別にどっちでもいいけど」という若干、強制力の緩いコード、  
ということですね。

もう少し音楽的に聴覚上の話をすると、

- ・トニック→安定
- ・ドミナント→不安定
- ・サブドミナント→少し不安定

というように人間は聴いて感じる、と捉えてもらえれば OK です。

人間の聴覚としては、基本的には『安定したくなる(=トニックに行きたくなる)』ので、ドミナントコードで不安定さを感じたら、安定したくなりますし、

サブドミナントコードでの、多少の不安定さならば、「まだ行ける」のか、「もう帰ろう」とするのかは自由、と言うことですね。

一般的な楽曲のコード進行は、主にこれら3つのコード分類によって、展開や進行感をコントロールされています。

では次に、ダイアトニックコードの、どれがどの分類とされるのかを見ていきましょう。これまで通り、メジャーキーでの解説です。

まず、ダイアトニックコード7つの内、「主要和音」とされる3つのコードがあります。その3つのコードとは、キーに対してI度、IV度、V度にあたるものです。

#### ※主要和音(I、IV、V)

<b>I</b>	<b>(IM7)</b>
<b>II m</b>	<b>(II m7)</b>
<b>III m</b>	<b>(III m7)</b>
<b>IV</b>	<b>(IVM7)</b>
<b>V</b>	<b>(V7)</b>
<b>VI m</b>	<b>(VI m7)</b>
<b>VII m(♭5)</b>	<b>(VII m7(♭5))</b>

この3つがそれぞれ、

- ・I度→トニックコード
- ・IV度→サブドミナントコード
- ・V度→ドミナントコード

に分類されます。

- I** (IM7) →トニック
- II m** (II m7)
- III m** (III m7)
- IV** (IVM7) →サブドミナント
- V** (V7) →ドミナント
- VI m** (VI m7)
- VII m( b5)** (VII m7( b5))

ダイアトニックコードのつは、この I、IV、V 度のコードを基準に分類していくのです。

ここで前回の課題曲、“Photograph”を例に、具体的にこの3つのコードが、どう使われているのを見ていきましょう。

まず“Photograph”のキーは A だったので、ダイアトニックコードはこの様になり、その内の T、D、SD にあたる I、IV、V 度のコードは以下の3つですね。

key=A ダイアトニックコード

- I、A** (AM7) トニック
- II、Bm** (Bm7)
- III、C#m** (C#m7)
- IV、D** (DM7) サブドミナント
- V、E** (E7) ドミナント
- VI、F#m** (F#m7)
- VII、G#m( b5)** (G#m7( b5))

そして前回載せた譜面の一部を見てみると、

The image shows two systems of guitar notation for the song "Photograph". Each system consists of a standard musical staff with a treble clef and a 4/4 time signature, and a corresponding TAB line below it. The first system has four measures with chord symbols A, F#m, D, and E above the staff, and F#m above the fifth measure. The second system has five measures with chord symbols D, E, A, D, and E above the staff, and A above the fifth measure. The TAB lines are currently empty.

まず曲のスタートである、1小節目がトニックコードであるAのコード。

次に5~8小節目をみてもらえればわかりますが、key=Aに対する、

サブドミナントであるDコード→ドミナントであるEコード→トニックであるAコード

と、SD(少し不安定)→D(不安定)→T(安定)のスムーズな流れになっています。

サブドミナントは、感じとしては不安定そこまで強くは無いので、まだトニックに行かずに、他のコードに進んでも良いわけです。

そして次にドミナントに進んで、不安定感を強くして、トニックに行きたくなる。(安定したくなる)、と、こういう事ですね。

先ほどもお話ししましたが、人間は基本的には安定したくなる(安定を感じたくなる)わけです。

なので、コード進行というものは、多くの場合、どうにかこうにかして、安定まで持っていくようなものになっている、と言うことです。

我々も、家から出かけるとしたら、色々と用事を済ませて、その内家に帰ってきますよね？

音楽もそれと同じです。

そしてこれらのコードの機能を理解して、

- ・時にはすぐに帰ってみたり、
- ・別の家に行ってみたり(転調など)、
- ・ずーっと家に帰らないでみたり、と

様々な感じ(雰囲気)を表現する(1つの技法)のがコード進行であり、コードアレンジである、とそういうことです。

その為のベースとなる知識が、今回のトニック、ドミナント、サブドミナントの分類なのですね。

それでは、今回は以上になります。

次回は、残りの4つのコードの分類と、事例として、引き続き“Photograph”を例に、その他の部分のコード進行の分析をしていきましょう。

ありがとうございました。

大沼